

山下高弘さんが語る、"見たことのない景色"を求めて選んだ、家族の暮らし。

——シリーズ第6回のゲストは、起業家の山下高弘さん。

大手銀行から証券会社のエグゼクティブへ、そして2013年に独立。ゼロからのスタートで飛び込んだカンボジアで、マイクロファイナンス事業を軌道に乗せ、いまでは金融、人材派遣、飲食、不動産など複数の事業を手がける経営者となった山下さん。家族4人でカンボジア・プノンペンに暮らして10年。「見たことない景色見せたるわ」という一言から始まった挑戦が、家族の暮らしと子どもたちの未来をどう育ててきたのか。じっくりお話を伺いました。

大手銀行員から、証券会社のエグゼクティブへ。順風満帆に見えたキャリアを自ら手放し、山下さんが選んだのは「見たことのない景色」を家族と見るという、まっさらな挑戦だった——。

「見たことない景色見せたるわ」——退路を断った挑戦のはじまり

— 独立からカンボジアでの創業まで、どのような道のりだったのでしょうか。

山下さん：

2013年に証券会社を辞めて独立した際、妻とはひとつの約束をしていました。「預貯金が底をつくか、3年で芽が出なければサラリーマンに戻る」。そう約束したうえで、「見たことない景色見せたるわ」と啖呵を切って、挑戦がはじまりました。ただ、現実はその甘くありませんでした。独立してから2016年に転機を迎えるまでの約3年間は、何をやってもうまくいきませんでした。

独立直後の半年は住む家すら見つからず、知人が持つ「日雇い労働者の仮住まい」で生活。ようやく見つけた家も、持ち家が窓から見えるという、なんとも屈辱的な環境の狭い賃貸物件でした。自宅は人に貸し、そのお金でローン返済と生活費をまか

ないながら、自分たちの貯金を切り崩し、家族4人でその物件に暮らす日々。当時、次男が「セブンイレブンのおでんが一番美味しい」と言うほど、生活は困窮していました。

転機が訪れたのは2016年。カンボジアでマイクロファイナンス事業のライセンスが正式に下り、ローン会社の収益モデルにも手応えが見えてきたタイミングで、家族を呼び寄せることを決めました。

戸惑いから、当たり前へ——暮らしが馴染んでいく時間

— 移住当初、ご家族に戸惑いはありましたか？

山下さん：

戸惑いは、正直あったと思います。ただ、もともと海外での暮らしに憧れがあったことや、子どもたちを幼少期から日本でインターナショナルスクールに通わせていたこともあり、語学や文化、人種への抵抗感は家族全員、あまりなかったように思います。

もちろん、生活習慣の違いに驚くこともありました。トイレの構造やお風呂(バスタブ)がないのが当たり前という環境に、最初は「お風呂に入りたい」「ウォシュレットが恋しい」なんて言



PROFILE

起業家

山下 高弘
TAKAHIRO YAMASHITA

SAHAKA Microfinance institution, PLC CFO
関西大学経済学部卒業(体育会サッカー部所属、98年度主将)

1999年、住友銀行(現SMBC)入行。2006年、三菱UFJメリルリンチPB証券(現・三菱UFJモルガン・スタンレー証券)へ転職し、2012年エグゼクティブダイレクター就任。2013年に独立し、シンガポール法人を設立。同年、カンボジアでの事業機会を模索しはじめる。2015年に人材派遣会社NiCamを、2016年にはカンボジア中央銀行からライセンスを取得しマイクロファイナンス事業「SAHAKA Microfinance institution, PLC」を創業。2020年にはバングラデシュの建設会社の経営再建にも携わる。2022年、日本国内で育成世代のアスリート向け食事マネジメントを行う「株式会社フィジカルコントロールセンター」を創業(現在9拠点)。2026年、シンガポール法人「SOLVERA Holdings Pte. Ltd」を設立し、Directorに就任。

🎙️ INTERVIEW

っていた子どもたちも、いつの間にか銃のような形をした洗浄設備に慣れ、今ではすっかり馴染んでいます。次男にいたっては、トイレのあとにシャワーを浴びるという、いかにも外国人らしい習慣まで身についたほどです。

セキュリティさんやドライバーさん、クリーナーさんという存在も、はじめは子どもたちにとって不思議な存在でした。「なぜ運転してくれるの?」「なぜママは掃除しないの?」と聞かれたこともあります。ですが、友人宅を行き来する中で、それが共働きを支える仕組みであり、この土地に根づいた「分業」の文化なのだと、少しずつ理解が深まっていきました。今ではもう、それが当たり前の光景です。

とはいえ、支えてくれる人々への感謝や敬意を忘れさせないことは、家庭の教育としてずっと大切にしてきました。一度だけ、車を降りるときに長男が聞こえる声で「ありがとう」を言わなかったことがあり、その場で路上で背負い投げをして、駐車場のセキュリティさんに慌てて止められるという失態を演じたこともあります(笑)。笑い話ではありますが、誰かに何かをしてもらうのが当たり前になってはいけない、という思いは、いつも根っこにありました。

住まいと、地域のつながりのなかで

— プノンペンでの住まいや、地域とのつながりについて教えてください。

山下さん：

住まいの作りや暮らし方は、地

方と都心部でまったく違います。プノンペンでは、地震などの災害が少ない国であることもあり、耐震性をあまり重視していない建物も多く見られます。都市計画も決して整然としていてるわけではなく、渋滞が起きやすい場所もありますが、最近は配車アプリの普及で、移動そのものはずいぶんスムーズになりました。

私たちは基本的に現地のアパートで暮らしてきました。家族4人で150平米前後(最大で330平米)の広さの物件を選び、これまで4度の引っ越しを経験しています。現在は、自社が一棟借りしているビルの上層階に住んでいて、セキュリティさんやドライバーさん、クリーナーさんたちがとても良くしてくれる環境もあり、不便を感じることはありません。

地域とのつながりという点では、村長制度がいまも残っていることが印象的です。決済のほとんどがアプリで完結する時代になりましたが、ローンの契約だけは、村長も交えて顔を合わせ、家族とも話をしたうえで結ぶ、とてもアナログなもの。返済が滞り担保物件を手放すことになれば、村長の署名も必要になるため、「恥ずかしい」という意識も働くようです。そうした地域のつながりの強さを、仕事を通じて日々実感しています。

子育てに関して言えば、プノンペンでは英語教育への意識がとても高いことも特徴です。現地の家庭でも、将来の仕事の幅を広げるために、英語の塾にだけは通わせたいという考えが根強くあります。



カンボジア・プノンペン市内の商店街のような街並み

自由と自己責任のなかで、育っていった子どもたち

— この10年で、ご家族やお子さんたちに、どのような変化がありましたか?

山下さん：

すべての意思決定において、良かったと感じています。次から次へと新しいことに取り組む毎日だったので、子どもたちには反抗する暇もなかったのかもしれませんが(笑)。ドライバーさんや社員たちの目もある、いわば狭いコミュニティのなかで暮らしてきたので、悪いこともあまりできなかったのではないかと思います。

学校教育の面でも、思い切った判断をしました。小学校では教科書の持ち帰りが禁止されていて、最初は不安もありましたが「自分が教えられる範囲は関西大学止まり。ここから先はグローバルな視点を持つ先生たちに任せよう」と、夫婦で腹を括りました。結果として、勉強を一緒にした記憶はほとんどないまま、長男はイギリス・マンチェスター大学を卒業し、この秋からオックスフォード大学院へ。

INTERVIEW

次男はオーストラリア・メルボルン大学に合格し、現在は他校の合否を待っている状況です。この環境だからこそ育まれたものがあるとすれば、それは「自由と引き換えに、自己責任を引き受ける」感覚だったように思います。この国では、格差があることも、多様な生き方があることも、「世の常」として大前提にある。

たとえば、原付バイクの免許制度がないこの国では、小学生でもバイクに乗れてしまいます。だからこそ、事故のあとの現実を目にしながら、「乗る?乗らない?」を自分で選ぶ機会になる。飲酒運転の取り締まりも決して厳しいとは言えないなかで、事故を目にした人が「飲む?飲まない?」を自分の頭で考える。誰かが引いてくれた線の内側で守られるのではなく、自分で線を引く。そうやって「自由に選び、自分で責任を持つ」という感覚を、日々の暮らしのなかで自然と身につけていった10年間だったと思います。

決まった正解や"普通"にとらわれない経験も、数多くありました。「500円の材料と5000円の材料、美味しい料理を作れるのはどちらか」というお題で、アイデア次第で500円側が勝ってしまうのを目の当たりにしたこともあれば、学校の先生同士が同性カップルで、生徒たちの前で結婚式を挙げてくれたこともあります。価値観や生き方の幅、許容できる範囲が、この10年でもっと広がったように感じています。

弊社で働く社員たちの成長を間近で見てきたことも、子どもちにとって学びになっているはず。年収が着実に上がってい

く社員の姿を見ながら、「夢を追いかけることの意味」についても、いい意味で理解を深め、挑戦し続けてくれているのではないかと考えています。



毎年4月に行う創業記念のお祈りの一場面

夫婦関係にも、変化がありました。月に10日ほど、日本やシンガポール、バングラデシュへ出張することが多いのですが、離れる時間があるからこそお互いを気にかけるようになり、プノンペンで一緒に過ごす時間を大切にすることが意識が芽生えた気がします。

難しさを感じたことは、実はあまりありません。むしろ、日本の理不尽な制度や過保護すぎる制度に触れるたびに、感覚の切り替えに混乱することも時折あります。

子どもたちへメッセージ

—最後に、これからを生きる子どもたちへ、メッセージをお願いします。

山下さん：

周りの誰もやったことのないことに挑戦してみて、本当に良かったと、心からそう思っています。当時は「カンボジア?本気で?」「地雷とかあるんちゃう?」なんて散々言われましたしお金を稼ぐこともなかなかうま

くいきませんでした。

そんな中、長男が生まれてすぐ、メリルリンチの入社へと導いてくれた当時の上司——私が心から尊敬する唯一のサラリーマンから、二つのことを教わりました。ひとつは、資本主義経済を大きく回すことを考えて、自分でお金を止めるのではなく、寄付や有効な投資に給料の一定額を使い続けるべきだということ。もうひとつは、子どもは海外で学ばせた方がいい、ということ。20年前に聞いた話とは思えないほど、今も実践し続けている心がけです。

漠然と夢見たことを、日課にまでブレイクダウンして、それを愚直に20年間続けてきました。その結果、長男も次男も、思い描いていた以上の環境にたどり着くことができましたし、自分自身もビジネスにおいて誰かの役に立てているという自負があります。

当時の自分には、正直、自信なんてありませんでした。自分より優れた人たちに勝っていくために、自分にできることは「時間を味方につけること」しかないんだと思ったんです。そこから、地道な継続がはじまりました。

だから、ありきたりかもしれませんが——何かをしたから、何かが成せるわけではありません。もっと大きく、長いビジョンで、たとえ漠然とした夢だったとしても、思い描いたことを実現するための道筋を、自由に描いてみてほしい。そして、その通りに進んでみてほしいと思います。想像したことは、案外高い確率で実現するものですから。

INTERVIEW

「見たことない景色見せた
るわ」——その一言とともに
手放したのは、日本での安定
した暮らしだけではなく、慣
れ親しんだ空間そのものだっ
たのかもしれませんが。先の見
えない挑戦のなかで、家族は
少しずつ、自分たちの手で居
場所をつくりあげていきまし
た。

住む場所、暮らす空間を選び
直すという決断が、家族それ
ぞれの"自分で考え、自分で選
ぶ力"を、静かに、しかし確実に
育ててきたように思います。
どこで、どんなふうに暮
らすかを選ぶことは、これか
らをどう生きるかを選ぶこ
と。山下さんご家族の10年
は、そんな"住育"のかたちを、
あらためて教えてくれました。



子どもたちに「自己責任」ということを教
えてくださった小学校の先生方と友人たち



長男のマンチェスター大学卒業式



SAHAKA MFI
together for prosperity

SAHAKA Microfinance institution, PLC ＜カンボジア・プノンペン＞

現地の人々の暮らしを支えるマ
イクロファイナンス(小口融資)事
業。地域に根ざした金融サービ
スを通じて、一人ひとりの自立
と挑戦を後押ししている。
<https://sahakamfi.com.kh/>



株式会社 フィジカルコントロールセンター

日本国内 9拠点。
育成世代のアスリートを対象と
した食事マネジメント事業。
「食」を通じて、未来のアスリ
ートたちの可能性を育てる場づ
くりを行っている。
<https://clubhouse-meal.com/>



JUUIKUBOOKS

すみかを育てる、心を育てる。

Juui kubooks

<http://juuikubooks.jp>

ABOUT

「〇〇さんと、住育を考え る」シリーズ

このインタビューシリーズは、
“空間を大切にすること”の意味
を、いろんな視点から見つめて
みる企画です。建築、教育、も
のづくり、暮らし……それぞれの
分野で活躍されている方々に
「空間」についての思いを伺
い、日々の暮らしのなかにあ
る"住育のヒント"を、一緒に見
つけていきます。すみかを大切
にすることは、自分自身を大切
にすること、そして、生きる力
をそっと育ててくれる。そんな
メッセージとともに、お届けし
ていきます。

住育(じゅういく)

「自分の“すき”が合った空
間」を育てることは、子どもの
“生きる力”を育てることにつな
がります。空間は、ただの場所
ではなく、心と深くつながって
いるもの。子どもたちが、自分
の空間に愛着をもち、その空間
を通して「自分を大切に思う気
持ち」を育てていく——それが
“住育”の考え方です。

Juui kubooks

“すみかを大切にすることは、こ
ころを大切にすること。”そんな
想いから生まれたプロジェク
ト、Juui kubooks (ジューイク
ブックス)。絵本や読みものを
を通して、子どもたちとその周り
の大人たちが、「空間を育てる
楽しさ」に出会うきっかけを届
けています。